

# 関一雄先生 著作目録

## 著書

国語複合動詞の研究

一九七七年二月

笠間書院

複合動詞変遷上の一問題

一九五九年五月

―「他動詞+出づ」から「他動詞+出だす」へ―

言語と文芸 一―四

いわゆる複合動詞の変遷

一九六〇年二月

国語と国文学 三七―二

複合名詞の一形式とその意味関係

一九六二年二月

―万葉と源氏の用例について―

山口大学文学会志 一二―二

平安時代和文語の研究

一九九三年十月

笠間書院

中古の複合動詞の名詞化をめぐって

一九六三年十一月

言語と文芸 五―六

一の塚川 国語国文論集

一九九七年五月

笠間書院

「いでたつ」と「たちいづ」

一九六四年十月

山口大学文学会志 一五―一

平安物語の動画的表現と役柄語

二〇〇九年四月

笠間書院

「まにまに」「ままに」考

一九六五年七月

山口大学文学会志 一六―一

現代語訳で読み直す『竹取物語』

二〇一九年十一月

地の文の動画的表現と登場人物の役柄語を活かす

笠間書院

「かへりみる」と「みかへる」の消長―複合動詞変遷の一例―

一九六六年十二月・一九六七年八月・一九六八年八月

山口大学文学会志 一七―二・一八―一・一九―一

## 論文

中古中世のいわゆる複合動詞について

一九五八年三月

―源氏・栄花・宇治拾遺・平家の四作品における― 国語学 三二二

「おもひいづ」と「おもひいだす」をめぐって

一九六七年七月

―日本文章史小見―

学芸国語国文学 二

堺本枕草子の語法と語彙

―三巻本との比較―

一九六九年一月  
国語と国文学 四六一―

補助動詞と用言的接尾語

一九七一年十二月  
国語と国文学 四八一―二

平安時代和文の用言的接尾語

―源氏物語と枕草子を資料として―

一九六九年六月

国語学論集佐伯梅友博士古稀記念 表現社

敬語の接頭語ミとオホンについて

―源氏物語と宇津保物語の用例対比―

一九七二年十一月  
山口大学文学会志 二二三

いわゆる接頭語「なま」の意味

―源氏物語の用例を中心に―

一九七三年十一月  
山口大学文学会志 二二四

平安時代のアクセントと復合動詞に関する私見

―「扇をさし隠す」の解釈をめぐって―

一九六九年七月

山口大学文学会志 二〇一―

平安時代仮名文学のいわゆる接頭語

―その用例メモ―

一九七四年十一月・一九七七年十一月  
山口大学文学会志 二二五・二二八

語法と文体

―『枕草子』―

一九七〇年一月  
月刊文法 二―三

平安時代の形容動詞語幹を作る接尾語

―和文にみえる「らか」「やか」「か」を中心に―

一九七〇年一月

山口大学文学会志 二〇―二

源氏物語会話文における敬語の接頭語ミ・オホンの用法

一九七六年九月  
言語と文芸 八三

接尾語の特質に関する一考察

―時枝学説への疑問―

一九七〇年八月  
学芸国語国文学 五

上代・中古の二、三の接頭語の意味について

―形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違の問題と関連させて―

佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集 表現社

体言的接尾語分類試案

一九七一年十一月  
山口大学文学会志 二二二

「なまにくし」から「こにくらしい」へ

一九七九年二月  
山口国文 二

接頭語「あひ(相)」の一考察 一九七九年二月

—中古和文資料の用例を訓点資料の用例と比較して—

中田祝夫博士功績記念国語学論集 勉誠社

接尾語「ぶ」「む」、「めく」「だつ」「がる」の消長(一)

—平安時代仮名文学の用例を中心に— 一九七九年十一月

山口大学文学会志 三〇

「かなしぶ」「かなしむ」「かなしがる」小考 一九八一年三月

—中古仮名文学の用例について— 山口国文四

接尾語「ぶ」「む」、「めく」「だつ」「がる」の消長(二)

—平安時代仮名文学の用例を中心に— 一九八一年七月

馬淵和夫博士退官記念国語学論集 大修館

「うつくしむ」と「うつくしがる」をめぐる 一九八二年三月

—中古仮名文学用語の一性格— 山口国文五

宇治拾遺物語の「和文語」動詞と「訓読語」動詞の一考察

—中古仮名文学用語の性格に関する一試論— 一九八三年三月

山口国文六

平安仮名物語用語の一側面 一九八四年三月

—「ぬ」「イヌ」、「かしら」「カウベ」、「および」「ユビ」—

山口国文七

とく・早く・スミヤカニの意味 一九八五年一月

—平安と院政鎌倉の用例について— 山口大学文学会志 三五

女流文学のことば

一九八五年十一月

日本語学 四—一

「いとをかしみてかへしす」(平中物語一段)考

—平安物語用語としての動詞— 一九八五年十二月

山口大学文学会志 三六

ばむ —だつ —づく —やぐ 一九八六年三月

日本語学 五—三

源氏物語の派生動詞—いわゆる接頭語による物語用語づくり—

一九八七年三月・一九八八年三月

山口大学文学会志 三八・山口国文 一一

古典解釈と文法—活用語

複合動詞—平安仮名文学用語として— 一九八八年四月

国文法講座 第二卷 明治書院

文学作品における用語選択の意識・中古 一九八八年八月

日本語学 七—八

いわゆる接頭語「うち」の意味 一九八八年十月

―源氏物語・枕草子・夜の寢覚の用例について―

太田善磨先生古稀記念国語国文学論叢 群書

いわゆる助詞「して」の性格

一九八九年十二月  
山口大学文学会志 四〇

平安和文における推量辞「むず」と物語用語「むとす」

一九九〇年十二月・一九九一年三月  
山口大学文学会志 四一・山口国文 一四

源氏物語のサ行変格動詞考 ―「物語用語」としての性格―

一九九一年十二月・一九九四年十二月  
山口大学文学会志 四二・四五

「入り給ふとすれど」（源氏物語・空蟬）考 一九九三年七月

小松英雄博士退官記念日本語学論集 三省堂

「なかなかなる物思ひをぞし給ふ。御局は桐壺なり」

（源氏物語・桐壺）考 一九九四年三月  
山口国文 一七

『枕草子』のサ行変格動詞考 一九九五年十二月

―「動詞連用形+（など）す」の用法をめぐって―  
山口大学文学会志 四六

「けはひす」と「けしきあり」 一九九七年五月

―類義語の意味の差と物語用語としての存在詞―

第一の坂山 国語国文学論集 笠間書院

『三宝絵詞』の用語と表現

一九九七年十二月  
山口大学文学会志 四八

『うつほ物語』本文と『源氏物語』本文

―絵解と絵巻詞書との対比を通して― 一九九八年三月  
山口国文 二一

平安時代和文語と中世王朝物語用語の側面（二）

―「―ぶ・む」動詞と「―がる」動詞の場合― 一九九九年一月  
日本文学研究 三四

『源氏物語絵巻』詞書の用語と表現

―『源氏物語』本文との対比による国語学的考察― 二〇〇〇年一月  
日本文学研究 三五

「おそる」と「おづ」、「たがひに」と「かたみに」の意味

―中世王朝物語用語の用例から平安時代和文語の側面を見る― 二〇〇一年二月  
日本文学研究 三六

『竹取物語』の用語と表現

二〇〇一年四月

— 「敬語」「和文語」「漢文訓読語」をめぐって—

奥村三雄博士追悼記念論文集 風間書房

「ずして」の意味

二〇〇二年三月

— 主として平安和文の用例を通しての分析— 日本文学研究 三七

『土左日記』の言葉選び

二〇〇二年三月

— いわゆる漢文訓読語と和文語の併用について—

梅光学院大学・女子短期大学部論集 三五

平安時代の表現語彙と読解語彙

二〇〇三年二月

— 文体史研究のあり方試論—

日本文学研究 三八

『源氏物語』の会話文の一面

— 「感動詞」の用法から—

二〇〇三年三月

梅光学院大学・女子短期大学部論集 三六

「まじる」「まじらふ」と「マジハル」

二〇〇四年一月

— 中世の作品の用例から遡行して考える中古和文の「まじる」—

「まじらふ」の意味—

日本文学研究 三九

漢文訓読語と和文語

二〇〇五年一月

— 語りの中の用法—

日本語学 二四—一

「みそかに」は、何故消滅したか

二〇〇五年一月

日本文学研究 四〇

『竹取物語』の表現手法

二〇〇六年一月

— 動画的表現と静止画的表現をめぐって—

日本文学研究 四一

『うつほ物語』の表現手法

二〇〇六年三月

— 「藤原の君」巻の動画的表現と静止画的表現をめぐって—

山口国文 二九

平安和文の「いわむや」の用法

二〇〇七年一月

— 会話文中の用例を中心に—

日本文学研究 四二

平安和文の役柄語

二〇〇八年一月

— 登場人物のセリフの特性—

日本文学研究 四三・梅光学院大学論集 四一

『松浦宮物語』の役柄語

二〇〇九年一月

日本文学研究 四四

『源氏物語』の表現技法

二〇〇九年六月

— 用語の選択と避選択・敬語の使用と避使用—

源氏物語の愉しみ 笠間書院

『うつほ物語』絵解と『枕草子』に見る〈ユル〉連接構文

追悼文・書評・随筆など

―「静止画的表現」について―

二〇二一年一月

日本文学研究 四六

関守次男先生を悼む

一九七八年

山口国文 一

昔物語の会話文に込められた登場人物のキャラ

二〇二二年一月

日本文学研究 四七

小野晋先生をお慰むする

一九八〇年三月

山口国文 三

賀茂保憲女集序文の語彙と築島裕説

二〇一三年一月

日本文学研究 四八

紹介 田中あつ子の二つの歌集

一九九二年三月

山口国文 一五

『三玉絵詞』の用語と表現 再考

二〇一四年一月

日本文学研究 四九

紹介 中村幸弘著『補助用言に関する研究』

一九九六年八月

国学院雑誌 九七―八

『竹取物語』の会話文

二〇一六年三月

山口国文 三九

国語国文学界の展望(二)

一九九六年十二月

文学・語学

『竹取物語』(かぐや姫の生い立ち)の表現技法

二〇一八年三月

山口国文 四一

書評 南芳公著『中古接尾語論考』

二〇〇三年六月

国学院雑誌 一〇四―六

古典の現代語訳試案

二〇一九年三月

山口国文 四二

『竹取物語』(帝の求婚)段を例に―

古典の現代語訳試案(二)

二〇二二年三月

―『源氏物語』橋姫巻(冒頭章段)を例に「けり」と「き」

の訳語分け―

山口国文 四四